

月とスッポン

大津 隆文

過日(八月八日)の日経新聞に、私には現実感に乏しい格差の記事が二つあった。

その一はエッセイコラム『あすへの話題』に載った作家林真理子氏の『日本最大の資源』。内容はある会での話題で、最近寿司屋が急激に高くなっており、予約も出来ない、理由はインバウンドの人達のせいだが、日本の最大の資源は料理だから我慢するしかない、との趣旨。

驚いたのは『ちよつとしたところは5万円がふつう』『7万円とった鮎屋もある』
由で別世界と感じた。

私にとって寿司屋といえば回転寿司の「スシロー」。一人1200円位でお腹も一杯、幸せな気分になれる。食通に言わせたらあれが寿司？かも知れないが、回転寿司はお寿司を庶民の身近にした功労者と、私は大いに評価、感謝している。

最近注文はタッチパネル方式。言葉は日本語だけでなく、英語、中国語、韓国語にも対応しており、外国人旅行者が嬉々として画面をのぞき込んでいる姿も珍しくない。「スシローさん、いい仕事していますね」と言いたくなる。

その二は『米CEO報酬、平均21億円』との記事。内容は2022年の米主要500社のCEO報酬は1480万ドル(約21億円)、平均的な従業員の年収の186倍とのこと、その格差には呆れてしまう。米国内でも高額報酬に対する批判は高まっているそうだが、市場主義経済下でどんな是正方法があるのだろうか。

ちなみに同じ年の日本の経営トップ(売上高1兆円以上)の標準報酬は1・6億円の由。米国とは一桁違っているが、それでも高額化している。

その昔日本が高度経済成長路線を走っていた頃、トップとヒラの報酬格差は7倍程度。エライさんもヒラと同じ作業服を着て、社員食堂で一緒に食事をするから、社員も会社と一体感を持ち頑張るのだ、と評価する経済学者がいた。

優れた人材は世界のマーケットで求めなければいけない、逆に海外からヘッドハンティングもある。そんな環境下で日本型経営はどんな道を探っていくのだろうか。